

荒野のストレンジャー

—マーク・トウェインの西部体験—

中 垣 恒太郎

マーク・トウェイン (Mark Twain, 1835-1910) の文学において、『西部放浪記』 (*Roughing It*, 1872) は重要な転換点に位置づけられる作品である。西部フロンティアを題材にしたトール・テールにより、ユーモア作家として登場した彼は、『西部放浪記』に先行する旅行記『ジ・イノセンツ・アブロード (赤毛布外遊記)』 (*The Innocents Abroad*, 1869) で国際的なベストセールスを記録した。出版社から次回作を期待された彼が選んだのは、『ジ・イノセンツ・アブロード』のような外国での旅行記ではなく、自身の体験に基づくアメリカの西部体験記であった。西部フロンティア作家「マーク・トウェイン」のイメージを形成していくという点で、この西部体験記はトウェイン文学の方向性を決定づける作品となる。

ここで改めて確認しておきたいのは、彼が西部作家マーク・トウェインになるうえで、どのようにマーク・トウェインの自己像 (セルフ・イメージ) を、この『西部放浪記』において作り上げていったのか、という問題意識である。当時のアメリカ西部観、旅行記というジャンルの隆盛という同時代の文脈からの視点がまず必要となるだろう。さらに21世紀に入った今現在、トラヴェル・ライティング批評の観点からは、この『西部放浪記』においてとりわけ少数民族への作者の眼差しという問題ゆえに強い批判に晒されることが多いという現状がある。生前は何よりも旅行記作家としての名声を博したマーク・トウェインにとって、こうした近年のトラヴェル・ライティング批評からの批判を避けて通ることはできない。トウェイン文学の根幹に位置する重要な問題であるからだ。

1. ツーリズム／ジャンルとしての旅行記

『西部放浪記』はその執筆において、まず読者層を意識した旅行記というジャンルの体裁をとっている事実の指摘からはじめることにしたい。1870年代の読者にとって、未だアメリカ西部の体験記は、いわば異国情緒に富んだ、もの珍しさこそが最大の魅力であった。トウェインはその期待にこたえるべく、読者の興味をひきつける素材をふんだんに用意している。冒頭のこれからまさに西部旅行に出発しようとする語り手の主人公の、西部での冒険への期待は、読者が求める西部のロマンスをそのままぞったものと言えるだろう。「インディアン、砂漠、鉱山での採掘」、こうした要素に魅了されて旅立つ語り手と共に、読者も冒険ロマンスの中に引き込まれる。

I was young and ignorant, and I envied my brother. I coveted his distinction and his financial

splendor, but particularly and especially the long, strange journey he was going to make, and the curious new world he was going to explore. He was going to travel! I never had been away from home, and that word "travel" had a seductive charm for me [...].

I dreamed all night about Indians, deserts, and silver bars, and in due time, next day, we took shipping at the St. Louis wharf on board a steamboat bound up the Mississippi river.

(*Roughing It* 1-2)

実際には、執筆時点から10年ほど過去に遡るこの西部体験記の執筆はなかなか書き進むことができず、難渋したことが知られている。「若々しさ」に満ちた語り手と実際のトウェインの過去との間の距離感も重要な意味を帯びている。トウェイン自身が西部にわたった年齢はすでに30歳代半ばであったが、この語り手はそれより10歳ほど若いような印象を受ける。伝記的事実との相違点を逐一指摘し、それを根拠にマーク・トウェイン像の生成過程をたどる研究も多く現れてきた。さらに付け加えるならば、トウェインが西部のイメージと、「若さ」を強調して結びつけた事実には、彼の西部観を見て取ることができるのではないだろうか。『ジ・イノセンツ・アブロード』はヨーロッパと対照させることで、アメリカの若さを強調する旅行記・文明論であったが、初めて本格的にアメリカに取り組んだ『西部放浪記』において、自身の「若さ」とアメリカ西部の「若さ」とがオーヴァラップさせられている事実は重要であろう。マーク・トウェインにとって、アメリカという素材が常に自身の回想録と結びつく点とも関わってくる問題である。つまり、フロンティアが存在していたアメリカ合衆国の若い時代をトウェインもまた若い時期に過ごした。彼が老年を迎える時、合衆国はすでにフロンティアを失っている。かつての若かりし頃への追憶には、合衆国の若さもまた必然的に重ねあわされることになるのだ。トウェインが過ごした1860年代のアメリカ西部の光景にはネイティブ・アメリカンの姿があり、迫害され移住をくりかえしていたモルモン教徒の生活、西部での中国系に代表される外国移民の姿が映りこんでいた。トウェインは好奇心旺盛な筆致で、偏見をも隠さずにその光景を書き留めている。それは同時に変貌し続けるアメリカの光景でもあり、失われゆく過去の光景でもあった。10年ほどの時間の距離を置いている事実もあわせて、『西部放浪記』は自身の過去への旅行記であり、アメリカの近い過去、失われゆく光景への旅行記でもあったのだ。

トウェインにおけるアメリカの過去の主題がもっとも強烈に現れたのは、もちろん彼の出身であるミシシッピ川流域を舞台にしたトム・ソーヤーとハックルベリー・フィンを主人公に据えた物語である。これらの小説では、トウェイン自身の幼少期の光景を如実に、そして過去へのノスタルジックな憧憬をもあわせて美化しつつ、1840年代南部の光景を再現している。南北戦争を挟み、近代化、テクノロジーの変化発展により生活習慣もまた変貌し、失われゆくアメリカの光景を描くというモチーフがトウェインの作品にはくりかえし現れている。であればこそ、『西部放浪記』においてすでに自身の過去と向き合う、いわば自伝的な作風がとられている事実は、マーク・トウェイン文学において、「過去」という素材がいかに重要なモチーフであるかを裏づけている。晩年に至り、彼は自伝の執筆

に精力を注ぐことになっていくが、その萌芽はすでに1870年代から現れている。その背後には19世紀中葉の、アメリカの急激な変貌が色濃く影響を与えていたのであろう。アメリカの光景を描く過程において、今ある光景までもがやがては移ろい、消えてゆくという事実を意識して、失われゆく運命にあるアメリカの光景を克明に記録、再現しようとする意志として現れたにちがいないからだ。そして旅行記というジャンル自体もまた、過去や異文化を「所有」する、いわば植民地化の発想に基づくという観点から、現在の旅行記の問い直しは進められている⁽¹⁾。

2. ゴー・ウェスト——ネイチャー／カルチャー

こうしたトラヴェル・ライティング批評の観点から、そしてそれと不可分な関係にある西部の理想化・ロマンス化の観点から、『西部放浪記』において近年注目されているのが、大自然西部の描写である。中でもタホー湖 (Lake Tahoe) という湖の美しさを称える描写は、自然描写の巧みに定評のあるトウェインの筆致の中でも屈指のもので、透明なタホー湖にボートを浮かべる様をあたかも気球に乗っているかのようにであると書き記している。

So singularly clear was the water, that where it was only twenty or thirty feet deep the bottom was so perfectly distinct that the boat seemed floating in the air! [...] Down through the transparency of these great depths, the water was not *merely* transparent, but dazzlingly, brilliantly so. All objects seen through it had a bright, strong vividness, not only of outline, but of every minute detail, which they would not have had when seen simply through the same depth of atmosphere. So empty and airy did all spaces seem below us, and so strong was the sense of floating high aloft in mid-nothingness, that we called these boat-excursions “balloon-voyages.” (*Roughing It* 153)

トラヴェル・ライティング批評の観点からマーク・トウェイン文学を捉えなおしたジェフリー・メルトン (Jefferey Alan Melton) の研究書『マーク・トウェイン、旅行記、ツーリズム』 (*Mark Twain, Travel Books, and Tourism: The Tide of a Great Popular Movement*. 2002, 109-14) によれば、タホー湖の美しさを称えるこの描写こそ、彼のツーリズムの眼差しが如実に現れているという。ここではロマンティックな夢想が実際の自然を覆い隠してしまっているというのである。そもそも『西部放浪記』の冒頭における語り手の冒険心こそが西部をロマンス化したものである。そして過去を回想するという体裁であるがゆえに過去へのノスタルジアも濃厚に存在している。『西部放浪記』の素材となる実際の西部体験においての彼は、未だ何者にもなっていない未知の存在であり、であればこそその自由を持つと同時に、「何者かになろうとせねばならない」焦燥感もあったにちがいない。ミシシッピ川蒸気船のパイロットの職を、南北戦争による川の閉鎖により失った彼は、ゴールドラッシュの熱が冷めやらぬ西部で一攫千金、立身出世を夢見て旅立った。実際の西部体験から10年ほど後に、『西部放浪

記』を執筆している時点の彼はすでにユーモア作家として地位を確立しようとしている段階であり、懐かしさと共に過去を回想し、さらに過去の書き換えをも試みているのである。

つまり、ミシシッピ川流域の物語に後に結実するような南部出身の作家であるにもかかわらず、マーク・トウェインはあえてブランド・イメージとして西部作家であることを強調しているのである。このイメージ戦略により、実際にはトウェインが西部で過ごした時代はそれほど長いものではないにもかかわらず、トウェイン以上に西部性の強い先達であるブレット・ハート (Bret Harte, 1835-1902) らの存在をも凌駕するほどに⁽²⁾、西部作家としてのマーク・トウェインのイメージは長らく後の文学史記述、批評史においても定着し続けることになった。

この西部でトウェインは文筆活動に目を向けるに至るのだが、トウェイン自身もまた西部に対する幻想を抱き、ロマンス化された西部観を通して、大自然や迫害される者たちの姿や、無法者が跋扈する無秩序の状態の光景を記録するという経験を活かして、ジャーナリストから作家へと転身を遂げていく。南部出身であった本名のサミュエル・クレメンズ (Samuel Clemens) が「西部作家マーク・トウェイン」に生まれ変わる瞬間である。

西部にはトウェインをも含めて、粗野で、様々な出自を持つ者たちが流入し、一攫千金を夢見て採掘に未来を託すのだが、彼らは、いわば過去を捨て去った者たち、西部で別の人格、新しい未来を得ることを求めて集った者たちであった。そうした西部への夢を中心にしたアメリカン・ドリームにおいてこそ、トール・テールに代表される独自の物語形式が発展し、かつぐ、かつがれるという関係性の中に、次に示すように否応も無く差別の問題も入り込んでくる。トウェイン自身が記述するとおり、過去を捨て去り、新天地を求めて目指した西部においても新たな階層が生じてくる。つまり、ゴールドラッシュに立会い、開拓者として西部の発展に寄与した者たちと、それ以後に流入してきた移入者の存在とは明確に区別されているというのである。

And many a time in Nevada, afterward, we had occasion to remember with humiliation that we were “emigrants,” and consequently a low and inferior sort of creatures. [...] the citizens around him are looking down on him with a blighting compassion because he is an “emigrant” instead of that proudest and blesseddest creature that exists on all the earth, a “Forty-Niner.”

(*Roughing It* 119-20)

こうした図式はアメリカ合衆国の成立史とも重なりうるものであるのだが、トウェインはここ西部では「遅れてきた者」として差別される側であり、かつ、外国人として流入する移民、迫害されて西部に追いやられてきたインディアンおよびモルモン教徒らが差別される様を記録する立場でもある。モルモン教徒たちを潜り込み取材するフィールドワークをトウェインは敢行し、一夫多妻制の実態を茶化して報告する試みなども行っている (100-01)。読者の期待に添うべく、好奇心を満たさんとするジャーナリストの眼差しがここにはある。一夫多妻制のために子供の数が多すぎて子供の判別がつか

ないという逸話をユーモラスに語っている。

また、インディアンに対しては、当時の最先端の科学であったダーウィニズムの思想を持ち出し、その野蛮さと種としての劣性を強調している描写がある⁽³⁾。

He said that Mr. Young told him several smart sayings of certain of his “two-year-olds,” observing with some pride that for many years he had been the heaviest contributors in that line to one of the eastern magazines; and then he wanted to show Mr. Johnson one of the pets that had said the last good thing, but he could not find the child. (*Roughing It* 100-01)

こうした差別的な眼差しはとりわけ今日の観点からは、マーク・トウェインの差別意識を示す箇所として取りざたされることが多く、複雑な問題をはらんでいることは事実であろう。マーク・トウェイン文学の根幹に位置づけられるユーモアの本質として、『ジ・イノセンツ・アブロード』が示すように、権威あるものを笑うという反骨精神と同時に、弱者への笑いもまた彼の本質として指摘しないわけにはいくまい。とりわけこの『西部体験記』には、当時の西部という無秩序状態においてなおも差別される立場にある者への差別的な眼差しに基づくユーモアを見て取ることができるだろう。それは当時の読者の期待の地平を意識したものであった。

西部という大自然の中で作り上げられつつあった異文化が混交する社会の中で、彼はジャーナリストとしての道を歩み出すことになる。つまり、西部という自然および社会こそがマーク・トウェインを形成していくうえでの立脚点となったのだ。『西部放浪記』における彼のジャーナリストの眼差しをたどることでマーク・トウェイン特有の着眼点の萌芽がすでに現れていることを確認することができる。

3. 「西部作家」マーク・トウェインの生成

当時のアメリカ合衆国の読者が異文化としての異国情緒を西部に求めていたように、南部出身のマーク・トウェイン、いや本名のサミュエル・クレメンズにとっても、西部は異国情緒にあふれた強烈な異文化体験であったはずである。若きサミュエル・クレメンズにとって、西部という異文化は何かが見出せるかもしれない希望として、『西部放浪記』の語り手の冒険心そのままにロマンティックに映っていたことだろう。であればこそ、理想と現実との隔差に落胆する姿も『西部放浪記』の、そしてトウェイン文学の主要なテーマとなるのも必然であった。南部ミシシッピ川蒸気船パイロットとしての過去を捨て、新天地西部で新しい未来を求めたはずの彼は、実際に西部で天職とも言える文筆家としての道を切り拓くに至る。西部ならではのトール・テールやフォークロアに魅了され、無法者として有名であったスレイド (Joseph Slade, 1829?-1864) の姿に興奮とロマンを感じた彼は、西部の伝統を活かして、法螺話に基づく読み物を物語ることから作家としての出発をする⁽⁴⁾。この『西部放浪記』は、出版の契約が取り交わされてから苦心して書き上げたという事情もあって、複雑な、洗練

されていない形をしており、後半部にはハワイ、サンドウィッチ諸島からの通信文なども挟み込まれているなど統一性に欠けている。また、『西部放浪記』から西部伝来の逸話が抜粋されて、短編集に収められたという経緯が示すように、『西部放浪記』はマーク・トウェイン自身の過去および、彼のペルソナが主題になりうるという発見であったと同時に、フォークロアの収集というフィールドワークの成果にもなるわけだ。

ジャーナリストとしての道を歩み始めた彼にとって、西部の自然という土壌が彼の想像力を奔放に解き放つ契機になった。今現在とは比較にならないほど、虚構と事実との間が緩く捉えられていたとはいえ、トウェインは「本当らしさ」を強調することで、トール・テールの手法を発展させた物語を新聞などに発表していくが、次の引用は彼の創作態度を明らかにする。

Next I discovered some emigrant wagons going into camp on the plaza and found that they had lately come through the hostile Indian country and had fared rather roughly. I made the best of the item that the circumstances permitted, and felt that if I were not confined within rigid limits by the presence of the reporters of the other papers I could add particulars that would make the article much more interesting. [...] My two columns were filled. When I read them over in the morning I felt that I had found my legitimate occupation at last. [...] With encouragement like that, I felt that I could take my pen and murder all the immigrants on the plains if need be and the interests of the paper demanded it. (*Roughing It* 276-77)

「読者が望むなら」(if need be and the interests of the paper demanded it), と読者を意識しながら、ユーモラスで奇想天外な物語を誇張して語るののである。他の記者がいなければもっと記事を脚色できた、という一節に彼の物語観が込められている。

このように、西部での異文化体験を基に、サミュエル・クレメンズは西部ならではの土壌を活かして、マーク・トウェインという作家像を作り上げていく。しかし、トウェイン文学の根幹にこの西部での体験が強烈な影響を及ぼしていることは確実であるが、トウェインの文学的関心はやがて西部から離れていく。従来伝記研究においては、東部の上流階級の女性であるオリヴィア (Olivia Langdon Clemens, 1845-1904) との結婚、東部文壇での成功などがその根拠としてみなされることが多かったが、実際にトウェイン自らが西部との距離を意識的に遠ざけたにちがいない。その原因となったのは、第一には彼自身が抱いていた西部への憧れが現実の前に崩れてしまうことであった。砂漠という大自然に憧れを抱いた彼であったが、実際の砂漠を前にしてその憧れは完全に現実の前に屈服してしまうのである。

This enthusiasm, this stern thirst for adventure, wilted under the sultry August sun and did not last above one hour. One poor little hour—and then we were ashamed that we had “gushed”

so. The poetry was all in the anticipation—there is none in the reality. (*Roughing It* 123)

大自然への憧れは、タホー湖の描写に見られるように、ロマンティックな感慨とともに美しく結実する一方で、大自然が持つ現実の厳しさに打ちのめされる彼の姿がある。

ジャーナリズムにおいてまでも、トール・テールの手法が認められうる西部の無秩序な混沌があればこそ、トウェインの文学は開花するに至り、想像をはるかに超えた大自然の雄大さに打ちのめされてこそ、トウェインの思想の桁外れなまでのスケールの大きさが醸成された。かつぎ、かつがれる、騙し、騙されるという西部特有の緊張感こそが、彼の人間観、思想、そして後の『ハックルベリー・フィンの冒険』(*Adventures of Huckleberry Finn*, 1885) に代表される文学に結実したであろうことも言うまでもない。既存の価値観がまったく通用しない西部の世界で生きる者たちの姿に、トウェインは人間の業とも言える奥深さを見て取った。混沌の中であらゆる価値観が転倒する体験を経たことにより、後のトウェイン文学に通底する価値の相対主義が醸成された。

サミュエル・クレメンズが文筆家としての天命を見出し、マーク・トウェインというペルソナを身につけるに至った重要な転換点がこの西部体験であり、さらにそのペルソナをある種の宣言(マニフェスト)として確立しえたのが『西部放浪記』である。そしてこの『西部放浪記』の末尾は、「楽しい旅」を回想することで終えている。

Thus, after seven years of vicissitudes, ended a “pleasure trip” to the silver mines of Nevada which had originally been intended to occupy only three months. (*Roughing It* 542)

ジャンルとしての旅行記を意識して、「楽しい旅」を締めくくっているが、冒頭の序文を思い起こすならば、トウェインは、単なる旅行記とも、単なる自伝とも、ましてや論文などとも異なる、独自の語り(narrative)のスタイルをこの『西部放浪記』で編み出した、と自ら記していた。つまり、この『西部放浪記』こそがマーク・トウェインのブランド・イメージおよび、彼の語りのスタイルを決定づけたものであり、「西部」という異文化こそがマーク・トウェインを生み出す土壌となったのである。西部で見出したトール・テールの手法は、トウェインが迂回して自身のルーツへと向き合うことになる、トム・ソーヤーとハックルベリー・フィンに代表される南部の物語において応用され、アメリカ独自の語りとして受け継がれていく。

4. トラヴェル・ライティングとして読み直す『アーサー王宮廷のコネティカット・ヤンキー』(1889)

それでは初期の西部における異文化体験がどのような形で具体的に、作家マーク・トウェインの作品に結実していったのかを展望してみたい。トウェインの文学には「移動」がくりかえし重要な形で現れるが、中でも『アーサー王宮廷のコネティカット・ヤンキー』(*A Connecticut Yankee in King*

Arthur's Court, 1889) では、19世紀アメリカから6世紀英国にタイムスリップするという設定が施されている。ここでは異文化との接触という問題が自ずから焦点となる。西部体験を経て、ジャーナリストとなったばかりのトウェインはまず新聞特派員として、ハワイでの風俗習慣をおもしろおかしく紹介するところから旅行記作家としての下地を築いたことをまず思い返してみたい。

The natives do everything wrong end foremost. When you meet one on horseback he turns out on the wrong side; they cinch a horse on the wrong side and mount him from the wrong side; their lineage and rank come down from the female ancestor instead of the male; the women smoke more than the men; the natives' English "no" generally means "yes"; [...].

(*"The Sandwich Island" Mark Twain's Speeches* 15)

ハワイの原住民たちは「まったくあべこべにふるまっている」と誇張して語り、アメリカ合衆国の読者にはなじみのない風習を読み物として紹介する。しかし実は逆にハワイの習慣から見れば、それを笑っている人たちの側の習慣もまたおかしく映るかもしれない。こうした着想の転換にトウェインは早くから意識的であった。また、すでに見てきたような、既存の価値観が通用しない西部の荒野の世界で過ごした作家自身の異文化体験が、後の小説家マーク・トウェインの「ストレンジャー」のモチーフにつながると考えるのが妥当である。インディアン、モルモン教徒、そして中国人といったマイノリティたちの姿に接した経験は、世界を外側から見る視点に受け継がれていく。すなわち、既存の価値観を問い直す眼差しである。それが小説にも活かされていく。

If we look at it another way, we see how absurd it is: if I had an anvil in me, would I prize it? Of course not. And yet when you come to think, there is no real difference between a conscience and an anvil. I mean, for comfort. I have noticed it a thousand times.

(*A Connecticut Yankee* 164)

「別の見方で眺める」ことによって、まったく次元の異なる、良心と鉄床という二つの異質のものを同じ次元で捉え、そこに何らの違いも見出さない。この発想は、冒頭でたどったように直線的で不可逆であるはずの時間軸をも「相対化」する発想、アメリカの歴史をも一つの可能性として「相対化」する発想、時間の単位までも「相対化」する発想に結びつくばかりか、時間軸を飛び越えることで人類の歴史や、地球の人々を宇宙から眺める晩年のトウェインの巨視的なマクロな視点につながっていくことになるのである。同じく『コネティカット・ヤンキー』で、たとえ王様であっても、彼が王様であると知らない人の目で見たら、まったく普通の人と変わらないという場面も同様の発想に基づくものである。こうした見方は異文化に接する「旅行」体験によって育まれてきたものである。

Dear, dear, it only shows that there is nothing diviner about a king than there is about a tramp, after all. He is just a cheap and hollow artificially when you don't know he is a king.

(*A Connecticut Yankee* 347)

『コネティカット・ヤンキー』ではハンク・モーガンが一人で、異文化に飛び込む中で、意志疎通がうまくできないでいる場面がある。お互いに通じ合えないちぐはぐな会話はおかしみを含むものであり、『コネティカット・ヤンキー』においてもユーモアとして描かれている。この場面でもハンク・モーガンの質問一つ一つに対して的外れな答えが返ってきて、最後には意思疎通を諦めてしまう。

言葉の意志疎通に関してはそれでも対等のやり取りが交わされていると言えるが、圧倒的に力のバランスが異なる場面ではどうだろうか。貨幣価値が異なることで優位に立ち、驚く現地の人たちの姿を見るのは痛快であろう。19世紀から6世紀への時間を隔てた旅行である『コネティカット・ヤンキー』は、言うまでもなく同時に発展の異なる異国、いわゆる未開地への旅の経験をも暗示させるものである。19世紀人に対して6世紀の世界の人たちは知識の面において到底、匹敵のしようもなく、19世紀人は常に自尊心を優越感で満足させることができるからだ。

After that, I was just as much at home in that century as I could have been in any other; and as for performance, I wouldn't have traded it for the twentieth. Look at the opportunities here for a man of knowledge, brains, pluck and enterprise to sail in and grow up with the country. The grandest field that ever was; and all my own; not a competitor nor a shadow of a competitor; not a man who wasn't a baby to me in acquirements and capacities: whereas, what would I amount to in the twentieth century? I should be foreman of a factory, that is about all; and could drag a seine down street any day and catch a hundred better men than myself.

(*A Connecticut Yankee* 63)

6世紀においては、文明人としてふるまうことで、ハンク・モーガンはさながら神のように万能であることに酔いしれる。いみじくも、彼にとっては未来である20世紀に向かうよりも、過去である6世紀に向かった方が、優位にたてる分、幸せであるという率直な感慨が記されている。これは文明の発展の度合いが異なる土地への「旅行」において実感される思いと言えるだろう。このように『コネティカット・ヤンキー』においては、過去を持たないアメリカが過去の欠落を埋めたいという願望として中世趣味の形をとりながら現れ、「過去」をもコロナイズ（植民地化）する意識として見受けられるのだ。この意識は、結末での悲劇を必然的に招き寄せる結果になるのだが、それでもなお、トウェインはこの作品以後も「過去」への呪縛にますますとらわれながら、過去を描く物語に没入していく。

そして少なくともこの場面でもまた、「過去」の世界への旅行は、「未来」の世界への旅行の可能性

と併置され、「相対化」されている。異なる文化への「旅行」を通じて、異なる時間を体験し、既存の社会通念があくまで一時的なものでしかないことを知る。そうした「相対化」の発想を、19世紀後半のアメリカにおける「旅行」による異文化体験からマーク・トウェインは培っていったのである。

結論

今日のトラヴェル・ライティング批評から見て、また、マイノリティへの作者の眼差しを見ることによって、『西部放浪記』の価値は果たして減ずることになるのであろうか。タホー湖の美しさを称えた自然描写に、ツーリズムの眼差しが見出せることで、彼のロマンティックな観光熱を否定すべきなのであろうか。

彼は確かにアメリカおよび世界の激変する様を、失われゆく過去を、再現し、留めおくモチーフに、生涯突き動かされた。『西部放浪記』以後の、あらゆる文筆活動の成果が、過去を記録するための営みであったと換言することもできるだろう。時にノスタルジックに、時にロマンティックに、過去を、自然を見る眼差しが見出せる。しかしながらそれは失われゆくものに対するオマージュなのであり、フロンティア消滅へと続く、激変の時代に立ち会った作家ならではの筆致であるはずだ。それを証拠に、トウェインの描く過去は、自然は、ただ手放しに賛美されるものではなく、理想と現実の落差に常に打ちのめされる彼の姿があるように、そこにはその時代を生きたものでしか描くことのできない緊張感を伴っている。トラヴェル・ライティング批評の観点を導入することによって、大自然西部という異文化社会の中で若きクレメンズが過ごした体験、およびその成果としての『西部放浪記』が、いかにマーク・トウェインの形成・思想に影響を与えたかを浮き彫りにし、失われつつある過去を記録する彼のモチーフの源泉を探ることができるのである。

注(1) マーク・トウェインの旅行記は1895年からの世界講演旅行をもとにした『赤道に沿って』(*Following the Equator*, 1897)を最後に発表されることがなかった。英語での講演興行が成り立つこの講演旅行は、帝国主義下の英語圏植民地の実態を見て回る契機となり、その後のトウェインは政治的な声明としてアメリカ膨張主義を批判していく。『赤道に沿って』の売れ行きがふるわなかったことから次作の旅行記の計画が頓挫してしまったが、トウェインは『赤道に沿って』で書ききれなかったインド、南アフリカについての執筆に意欲を燃やしていた。旅行記のジャンルの隆盛を背景に、作家としての基盤を築いたトウェインであったが、「支配／被支配」を直接、想起させる帝国主義の下での彼は、「旅行をする者／される者」、「観察する者／される者」という旅行記が必然的に持つ構図の限界に気づいていたと思しい。旅行記というジャンルの行き詰まりともあわせて、『赤道に沿って』は近年、注目されている。

(2) 「西部作家」トウェインの先達として、ブレット・ハートはトウェインよりも年少ながらも西部特有の光景を文学の素材として逸早く用い、ローカル・カラー作家の先駆者として文学史上に位置づけられている通りであるが、二人は戯曲の共作（「アーシン」, "Ah Sin: The Heathen Chinee," 1876）を残している。すでにこの時期のハートは一頃の人気をすっかり失っており、一方、トウェインは共作『金めつき時代』(*The Gilded Age*, 1873)が時代を代表するベストセラーになるほどの人気作家であり、さらに『トム・ソーヤーの冒険』(*The Adventures of Tom Sawyer*, 1876)を準備している最中であった。戯曲「アーシン」はハートの作品中の

登場人物を元にした中国系アメリカ人を主人公とする。舞台での興行は失敗に終わったが、西部をたくましく生きる中国系アメリカ人の表象として現在では改めて注目されている。

- (3) トウェインの人種差別意識を議論する際に、とりわけインディアン観が焦点となることが多い。奴隷制度下の南部に生まれ育ったトウェインにとって、黒人は身近に接することができた存在であり、幼少の頃に植えつけられた「動産」(property)としての黒人奴隷の姿と、現実の黒人の姿との間を生涯、揺れ動いた足跡が認められるが、遠い存在であったインディアンは当時の冒険物語の枠組みをそのまま踏襲するように、トウェインの物語においても、冒険物語を機能させるうえでの「危険な存在」にすぎない役割しか与えられていない。しかし、この西部でインディアン、および中国系アメリカ人の姿に接した体験は後のトウェインの主要なモチーフである「ストレンジャー」に少なからぬ影響を与えたにちがいない。
- (4) 『西部放浪記』において、トウェインが身につけたトール・テールを逸話として織り込むスタイルは、『ハックルベリー・フィンの冒険』の中に発展した形で顕著に現れている。「小説家」マーク・トウェインの形成としてもまた、西部体験が重要であるゆえんである。

引用参考文献

- Melton, Jefferey Alan. *Mark Twain, Travel Books, and Tourism: The Tide of a Great Popular Movement*. Tuscaloosa: U of Alabama P, 2002.
- Twain, Mark. *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court*. 1889. Berkeley: U of California P, 1984.
- . *Roughing It*. Berkeley: U of California P, 1996.
- . *The Innocents Abroad*. New York: Oxford UP, 1996.
- . "The Sandwich Island." *Mark Twain Speeches*. Ed. Albert Bigelow Paine. New York: Gabriel, 1923.
- Wonham, Henry B. *Mark Twain and the Art of Tall Tale*. New York: Oxford UP, 1993.